

学芸員課程教育の充実に向けて

背景・目的

本学学芸員課程は、開設各学科から選ばれた専任教員で組織する学芸員課程運営連絡会が統括し、各科目担当者と連携して教育内容の充実を目指してきた。2012年度より、法律改正により、科目数が増大するなど、大きな変更が行われ、今年度はその第一期の学生（3年生）が博物館実習に臨むこととなったことを契機に、改めて、課程運営連絡会として、学芸員課程の教育充実を検討することとした。

実施の状況

学芸員課程関連科目は、文化史・美術史・民俗学・考古学の一部を除き、そのすべてが非常勤講師によって担当されている。それは、実際の現場経験者による指導が最も有効と考えてのことであるが、課程運営連絡会は、3年次の総仕上げというべき、博物館実習にかかわる特別講習の企画・展示実習の実施、また、2年生の見学実習引率等を担当し、その充実を期している。以下、今年度の取り組みについて、紹介していくこととする。

〈見学実習〉

この実習は、3年次に行われる館務実習の受講可否、また実習館の決定のための準備として実施するもので、今年度は例年通り、歴史・文化系（大久保尚子）、美術系（井上研一郎）、文学系（伊狩弘）、音楽系（太田☆☆）の4コースを設置し、希望者を募って実施した。引率者は、この実習のまとめとして、学生から提出されるレポートを添削する。学生が夏休みに実習希望館を見学して提出するレポートの事前指導ということになる。単なる感想文にならないよう、アクセスから、展示構成、個々の展示、

アメニティ等、総合的に観察して評価することを体験させている。この事前指導により、夏休み明けに提出されるレポートで、博物館実習に進めない学生は、今年度もゼロであった。

〈シンポジウム〉

夏休み明けに提出したレポート審査に合格し、実習館が決まった学生には、11月中から、博物館の教育普及活動の事前体験として、翌年夏休み前に実施するシンポジウムの企画・実行に取り組ませている。今年度は、井上研一郎が主担当となり、大平聡・櫻井美幸が補助した。今年度は、7月12日（土）に『震災』を展示する～モノ・ヒト・コトバ～をテーマに、東日本大震災に関する展示として注目されているリアス・アーク美術館の活動を取り上げ、同館の山内宏泰氏を招いてシンポジウムを開催した。山内氏は、3.11の大地震と巨大津波について、かつて同じ場所を襲った地震や津波の記録があったにもかかわらず、大きな災害がもたらされたことを指摘し、その反省の上に立ってリアス・アーク美術館に「東日本大震災の記録と津波の災害史」という常設展示をオープンさせたことを語った。

普段は接することのない他学科の学生と半年にわたり、様々な初めての体験をするこの実習は、半径3メートルの関係と言われる現在の学生にとってはかなり負担感の大きい実習になってきたようである。しかし、コミュニケーション能力が大切なことを知る絶好の機会であり、社会性を養う貴重な経験となっていることも事実で、シンポジウム終了後には大きな充実感を得る学生が多い。

なお、現在は、今年7月25日（土）の開催を目指し、来年度博物館実習受講予定者が活動

を開始している。



〈展示実習〉

今年度は、展示実習として、例年行っている一眼レフカメラによる撮影実習の成果展示となる写真展に加え、「学校日誌にたどる昭和の記録・戦争の記憶」展を実施した。

写真展は、今年度初めての試みとして、パソコンによるプリントアウト作品を加え、一人二点ずつ、出展した。パソコンの出力でも十分鑑賞できる作品を選ぶのに、受講生は苦心したようであるが、昨年購入したフレームで展示したため、十分、鑑賞に足る作品展となった。

「学校日誌にたどる昭和の記録・戦争の記憶」展は、大学祭に合わせ、実習室で実施した。昨年度、気仙沼市民会館で行った「学校日誌から見る昭和の気仙沼」展の経験に基づき、大平聡が主担当となり、井上研一郎が補助した。学生は、総数 100 点を超える作品の展示作業を行ったが、伊達政宗像の展示では、東北歴史博物館千葉直樹氏のご協力により、テグス糸での固定作業を間近に見せていただくことができた。なお、この展示はテレビ局 2 局、新聞社 2 社が

取材に来たほか、NHK ラジオ・テレビで紹介され、学外の多くの方々に見ていただくことができた。会期中は、博物館実習受講学生（3 年生）が受付を行った。

なお、3 月には、今年度をもって統合のため閉校となる気仙沼市立白山小学校の閉校式に「白山小を忘れない」展を同校で開くべく、現在準備中である。

〈特別実習〉

今年度も例年通り、美術系・歴史系それぞれの分野の特別実習を行った。

美術系では、油彩画の修復と日本画の保存・表装と掛け物の扱いの特別実習を行った。油彩画については東京の修復家・藤野いづみさんに油彩画の基本的知識と画面の洗浄作業の実際を学生たちにも体験させていただき、日本画については仙台の表具師・小林嵩氏に表装の基礎知識と裏打ち作業の実際を見せていただき、学生たちは掛け軸の取り扱いを体験した。

歴史系では、赤外線カメラによる出土文字試料の観察法、甲冑の取扱いの特別実習を行った。



〈事業体験〉

震災復興祈念と銘打って開催された「室生寺展」(7/4~8/24 仙台市博物館)の会期中、とくに入場者の多いお盆期間を中心に、学芸員課程実習生たちが展覧会の運営補助業務を体験する「事業体験実習」が行われた。河北新報社との連携事業として 8 日間で延べ 23 名の学生が参加し、受付や監視などの補助業務を体験しな

がら展覧会事業の実態に触れる貴重な機会となった。

今後に向けて

学芸員課程は、このところ受講生の減少が際立ってきた。原因は、何といても博物館法施行規則改正の結果、科目数・授業数が増加し、他の資格と合わせて履修することに困難を感じる学生が増えてきたことによると思われる。また、かつては、入学時に学芸員になりたいという学生が多くいたのに対し、最近では課程を受講しようとする学生の中に、学芸員という職業をほとんど理解していない学生もいるという現象が多くなってきたことも気になるところである。本学学芸員課程は、学芸員になるという目標に加え、もう一つ、博物館・美術館利用のプロになるという目標を掲げている。

本学学芸員課程は、課程運営連絡会の実践的機能により、他大学にない、充実した学芸員養成プログラムを提供しており、今年度の取り組みでもその意義は十分確認された。しかし、今年度は、その運営体制に大きな問題点が内在していることが露呈した年でもあったことを付記し、今年度の教育実践研究の報告とする。